市岡小学校110年のあゆみ

1945

焦土化した市岡のまち



大阪大空襲



▲空襲で焼け野原となった港区市岡のあたり（毎日新聞社）

1945年（昭和20年）3月13日夜半からの第1次大阪大空襲では、港区が米軍の主要な標的となりました。大量の焼夷弾が投下され、市岡をはじめとする街のあちこちから火の手が上がりました。この空襲により港区の88.6%が焦土と化し、街は壊滅的な被害を受けました。

当時を体験された方は、「夜空を焦がす炎やサイレンの音がトラウマになり、長年思い出すことすらできなかった」と語ります。しかし、「二度と戦争を繰り返してはならない」という強い思いから、現在は子どもたちへ戦争の惨状と平和の尊さを伝え続けています。

夕焼けが怖い

3月13日、空襲警報のサイレンで、いつものように家の中の防空壕に親子５人身を寄せる。その日は、どうも外の様子が違う。「敵機襲来。外の壕へ」……。外に出ると頭の上をB29爆撃機が編隊を組んで轟音を立てながら雨あられのごとく焼夷弾を落としていく。

終戦まであちこちで爆撃があり、夜空を焦がすのを見た。疎開先での光景が……夕焼けの空、サイレンの音もトラウマになった私。「思い出したくない、しゃべりたくない」と体の奥に固く封印して歳を重ねた私。ところが、ある人との出会いをきっかけに、説得を受けて、「二度と戦争をしてはいけない」と、小学校で空襲の体験を語り始めた。

（「戦争を体験されたAさんの話」より）

戦時中の生活

●戦時中の生活の厳しさ

・食べ物も着るものも不足していた。
・父親たちは戦地へ向かい、残された家族も厳しい生活を送っていた。
・本土に残った女性や子どもたちは、家族の生活を支えるため、家事や仕事の手伝いに追われていた。
・戦時中のラジオでは、日本の戦果のみが報じられ、損失は報じられなかった。



▲戦争を体験されたBさんの話を聞くようす

●戦時中の教育と学徒動員

・当時の義務教育は国民学校（現在の小学校）６年で終了。
・女学校の女子生徒は、兵隊に行った工員の代わりに工場で働いた。
・中学生も工場で働き、大学生は戦争末期に「学徒動員」として徴兵。
・優秀な学生や有名な野球選手も命を落とした。

（「戦争を体験されたBさんの話」より）

できごと

1945年（昭和20年）3月 14日	大阪大空襲により被災。 講堂及び講堂階上木造４教室（裁縫Ｉ・普通教室４）焼失。 倉庫一棟並びに防空壕に移した重要書類が焼失。
4月　1日	防空対策に基づく国民学校臨時教育措置により、本年度は学校における授業は停止。集団疎開児童並びに高等科児童以外の初等科児童の多くは、全家庭疎開、または縁故疎開して、それぞれの地方に転出。
4月16日	昭和20年度集団疎開児童11名が、浪速区日東国民学校に転校し、その後疎開先の滋賀県野洲郡中里村に出発。
6月　1日	高等科を停止。